

# 刺 繡 と 論 争

—『アーケイディア』の女性像 1—

小 塩 ト シ 子

## はじめに

サー・フィリップ・シドニーの『アーケイディア』(*The Countess of Pembroke's Arcadia: The New Arcadia* 以後NAと略記)については、その文学形式をなんと命名したらよいのか。「ギリシャ風ロマンス」にその源をもつ「牧歌形式のロマンス」(pastoral romance)と呼ぶ人がいるかと思えば、「アルカディア的叙事詩」とか「英雄叙事詩」(heroic epic)と名づける人もある。それぞれの系譜に位置づけられる面をもちながらこの作品はむしろ、それらの混合体(mixed genre)を生みだしている。物語の舞台となったアーケイディア国は、伝統的牧歌文学にみられる、羊飼いの健全で理想的な姿ばかりではなく、語られるのも恋と冒険についてばかりではない。統治する者の責任をめぐる問題や、神意を探って人間の理性や判断が犯す過ち、愛というものの<sup>ま</sup>儘ならぬ性質をめぐる、前後の脈絡が見えぬ程複雑に入り組んだ仕方で、一見無秩序と思われるようにして<sup>ちりば</sup>鑲められたエピソードの連続体として、われわれ読者の目の前にさし出されている。『旧アーケイディア』(*The Old Arcadia*以後OA)では、五巻あるいは五幕仕立ての起承転結が目論まれていたことも考えられる。しかし改稿されたNAでは、およそそのような全体を見通すデザインを持たぬまま、シドニーは例の「楽しませて教える物言う絵」(a speaking picture, with this end to teach and delight<sup>(注1)</sup>)を書き綴っていった、突如筆を折ったというのであろうか。作品の未完の結末については別の課題であるとして、あの複雑で大部の物語にどのような内的構築原理が秘められているのか、エリザベス朝の読者ばかりで

なく、現代のわれわれ読者をも教え楽しませるとすれば、その魅力はどこにあるのか。

20世紀のシドニー論、とくに近年世に問われる数多くの『アーケイディア』論<sup>(2)</sup>は、この巨大な構築物と言うべき作品の手法、文体、レトリックに関するものと、政治と文化の歴史的文脈を洗い直して作品を解釈するという二つの傾向をもっている。それに加えてこの作品の女性たちに光を当てて論じるものも目立つ<sup>(3)</sup>。小論もその一つであるが、ではまず作品に登場する女性たちを主として取り上げて論じることにはどのような意味があるだろうか。

秘められた多くの主題と錯綜するプロット、多様な登場人物を有するNAという作品に立ち向かうにあたっては、自ら取扱う範囲を限定するのが賢明であろう。表題に掲げた女性像ひとつを取上げても、すでに多種多様なアプローチが予測できる。『アーケイディア』におけるジェンダーを問題とするとき多くの論がフェミニズム批評の影響を免れないが、小論ではできるだけテキストに沿って作品中の女性像を浮かび上らせてみたい。

OAと比較してNAに顕著な特徴の一つは、男性主人公の‘heroic action’に筋の中心が置かれるばかりでなく、王女たちを中心とした女性の役割が格段に大きくなっていることである。王女たち自身がしばしば「語り」の役割を引き受け、また明確な自己表現をする存在として創造されている。国王、王子たちも公的存在としてばかりでなく、その私的な結びつきが、主題に絡んで問題として浮かび上ってくる。統治者のあり方や王子の冒険遍歴が、彼等自身の物語というだけでなく、男と女、父と子、夫と妻あるいは「家族」といった単位から見ることができる。王家の女性は、統治する女性として、また母、妻、娘として男性主人公たちと同じような課題の数々を与えられているのである。曰く愛、友情、正義、勇気、忍耐、神意を求める知性と理性など。そしてむろんのこと、美と徳の完成の故にあらゆる障害を乗り越えるための試練。NAではとくに男性主人公の‘heroic action’と平行して、あるいは絡み合った形で、若い王女たちの‘heroic action’も示されるといった印象がある。OAとはちがった形で展開されるNAの第三巻においてこのことは目立っている。そこで女性たちは輝いてい

る。以下その女性像をスケッチしておきたい。

## 1. 献辞と読み手とシドニーの女性たち

作品を読む前にもう一度『アーケイディア』と女性というテーマの必然性と根拠に触れておこう。それはまず *The Countess of Pembroke's Arcadia* という題名にすでに表されている。もっともこの題名はシドニーが最初からつけたものではなかろう。しかしペンブルック伯爵夫人に献げられた作品と考えられることは、1590年の初版に添えられた妹メアリ（すなわち伯爵夫人）宛の書簡<sup>(4)</sup>に読みとることができる。つまりこの作品はソールズベリー近くの夫人の館ウィルトン・ハウスで、ひたすら夫人の願うところに従って書かれるか、さもなければ出来次第、夫人の手元に届けられたのであった。つまり夫人がこの作品の最初の読者であり、まずはその意味で女性のために書かれたといえる。おなじ書簡でシドニーは自分の作品を「ほんの手すさび」(this idle work of mine) と呼び、また弟ロバートに宛てた1580年10月18日付の手紙でも“my toyful book” (PW 132) と呼んでいる。「この作品」「私の本」が1580年の時点でどの手稿を指すのか、また作者のこめた意味が奈辺にあるのかは定めがたい。素直に謙譲の言葉と解釈しても、妹宛の上記の書簡でシドニーは続けて次のように言っている。じっさいつまらぬものではあるけれど厳しい目に触れてつまらぬと一蹴されるよりは、伯爵夫人とほんの限られた友人たちに読んでもらいたい。何故ならそこでは、作者の筆の過ちも善意と天秤にかけて張消しにしてもらえるだろうから、と。手稿が回覧され読み手となったであろう限られた友人たちとは、伯爵夫人の文学サロンに足を運んだ文人たちであったろう。フランス (Abraham Fraunce), ブルトン (Nicholas Breton), バクスター (Nathaniel Baxter), モフェット (Thomas Moffett), スペンサー (Edmund Spenser), ダニエル (Samuel Daniel), ドレイトン (Michael Drayton), グレヴィル (Fulke Greville), ダイア (Edward Dyer), フロリオ (John Florio) らに加えてエミリア・ラニア (Aemilia Lanyer) もいたと考えられる。

OAでは語り手がしばしば“Fair Ladies”と呼びかける場面があって、上記

文人たちと同じように高度に知的な女性読者が想定されているとあってよいであろう。じっさいそのような女性たちが、回覧される手稿を折りにふれて手に取って楽しみ、また座右に置くといった姿が想像できる。パストラル・ロマンス風の恋物語を中心に据えたOAから、作者の改稿によってより複雑で精緻な技巧をちりばめたNAとなった時、語り手は“*I*”として姿を現わすことがほとんどなくなり、“*Fair Ladies*”というアポストロフもなくなって、語りは別々の登場人物の口に分散して行われることになるのは事実である。ということはしかし、物語の聞き手、読み手から貴婦人たちが除外されて、もっと広く男性女性を問わない読者層に向けて改作されることになったのであろうか。そうではあるまい。先述したように王女が語り手ともなったのであり、除外されたのではなく、女性が語り手と読み手に広く吸収されたというべきであろう。「熱情」と「共感」を持って読んだ女性たち（〔Com〕*Passionate Women Readers*）についてメアリ・エレン・ラムの語るどころ<sup>(5)</sup>も肯けるのである。

読み手について見たあと、作者シドニーをめぐる実在の女性たちと『アーケイディア』の女性たちについて一言しておきたい。この二つの関係はいわば合わせ鏡の役割をして、『アーケイディア』の女性像を結ぶように思われるからである。

シドニーの家系が女系というか、母方の血縁に際立って強く個性的な人物が多いことはよく知られている。母メアリはエリザベス女王の寵臣レスター伯ロバート・ダドリーの姉であり、メアリ自身女王の幼い頃から親しい関係にあった。シドニーの妹メアリは言うまでもなく、弟ロバートにはやがてサー・ロバート・ロースと結ばれる娘メアリがあり、彼女は『アーケイディア』の向うを張るロマンス作品『ユーレイニア』(1621)を書くことになる。この家系に生まれ育ったシドニーに、女性たちは大きな影響を与え、そこからシドニーが女性につよい関心を寄せ、また一般に女性性というものを評価していたことは、NAの女性像を描き込んでいく過程でも大きく作用したと思われる。

まずNAの最初場で言及されるユーレイニア(Urania)がペンブルック伯爵

夫人と目されることがあるが、作品中に登場しつづける人物ではない。むしろ作品の枠を越えて存在するアイデアの意味を荷っているとはいえよう。

ヒロインの一人フィロクリア (Philoclea) に「ステラ」(Stella) ことペネロピー・デヴェルーの理想化された面影を見ることは比較的た易い。フィロクロアの美しさが讃えられるとき (NA 84) 瞳の黒さが言及され<sup>(6)</sup>、住み処を描写して「星型」と言い (85,86)、二巻 (143) で珍しく語り手“ I ”がとつぜん顔を出して、これまであなたの心情を慮ることをせずにはいたと言って、赦しを乞うている。おなじ二巻の馬上槍試合に作者の名を思わせる (アナグラム) フィリシディーズ (Philisides) が登場し、その楯の意匠に “Spotted to be known” (255) という Sidney 自身の用いたものが示され、窓辺に寄って試合を観る貴婦人のなかに「その方のためのレースだと心得ている『きら星』」(‘the star’ his course was only directed 255) の存在を記し、天空の星に喩えるところからも、このことは肯けるであろう。

次に、よりつよく結びつきを感じさせるのは、パーシニア (Parthenia) がシドニーの母メアリの面影を映している点であろう。母はかつてエリザベス女王のお膝元で乳母役をしていたとき、幼い王女が天然痘に罹ったのを献身的に看護して自分がその病いのためにひどく顔面を歪めてしまったのであった<sup>(7)</sup>。パーシニアもデマゴーラスに毒を塗られておなじ苦難に遭いながら、精神的には誠実を貫きとおす人物である。メアリ・シドニーとパーシニアは二人共「艱難人を玉にす」の諺にあるように苦難の中で勇気を示し、健全な理性を働かせ、さらには夫に従う道を行く。NA三巻でパーシニアと夫アーガラスの平安な生活のさなかに、主君バシリアスからの緊急な要請が伝えられて、最愛の妻を離れて戦いに出ていくアーガラスの姿 (371-2) に作者が、父サー・ヘンリーを重ねて思い描いたとするならば、この二人の間の美しくも悲劇的な色調を帯びた物語は、シドニー・サークルの読者たちにとって一層リアルな連想をかき立てたかと推測される<sup>(8)</sup>。

さらに当時のより広い読者層にとって、実在の人物と重ね合わせて考えたくなったかも知れないのは、セクロウピア (Cecropia) とカトリーヌ・ド・メジ

チ、コリントの女王ヘレン (Helen) とエリザベス女王かも知れない。

セクロウピアは、みずからはアルカディア国の支配権を手に入れることができなくなって、わが子アンファイアラスにはなんとしても相続権を得させたいという野心をもって、王女に結婚を迫る。アンジュー公とエリザベスを結ぼうとしたメジチ家の女主人を暗示する人物といえるかも知れない。セクロウピアが、パミーラ姫とのいわば「神学論争」をくりひろげたあと排撃され敗北を喫するのも思わせぶりである。

さてエリザベス女王の反映を、コリントの女王ヘレンとイベリアの女王アンドロマナ (Andromana) という相違する二人物に見る見方がある<sup>(9)</sup>。美しさと資質に恵まれた女王ヘレンが、生れつき持っていた統治の能力ゆえにかえって統治されることを嫌い、多くの内外の求婚者を排してきたこと、自らはつよく望んだ人アンファイアラスとは結ばれぬ運命にあることなどが、アンジュー公やレスター伯その他との関係でエリザベス女王を彷彿させるという。一方アンドロマナは、「ひどく赤味がかかった髪と小さな眼」(95)といわれており、欲望のままに動く否定的な性格として描かれる女王である。作者シドニーの私的な感情からすれば、叔父レスター伯に対し、またシドニー一族に対して女王が示した態度や仕打ちのために、その性格を嫌悪したかも知れない。シドニーは当時の宮廷人の常として女王礼讃の言辞を用意しており、それがヘレンの姿には肯定的に表現され、しかし一方でアンドロマナの暴君ぶりを否定的に描いて私的感情を吐露したとも考えられよう。統治の問題に踏み込むとなると、シドニーはアーケイディア国王バシリアスに焦点を合わせて考えているのであるから、上に挙げたような断片的なイメージを拾いあげて、重要な主題と関わらせることはできない。

以上のような実在の人物に関する推測はある程度は当る可能性があるであろう。しかし『アーケイディア』はフィクションであり、作者のそこにおける人物創造は偉大なフィクションで、すべての憶測をはるかに越えていることは間違いない。つとにE. グリンローがこの作品をエリザベス朝のアレゴリーであると論破し、その政治状況を反映していると言った時 (1932) から、今日さ

かに論じられるプロテスタント・ポリティックスとシドニーの関係や歴史的  
人物探しに至るまで、忘れてならないのは虚構性とシドニーの構築技術アーキテクトニクスの力  
である。ただ、当時の読者あるいは物語の聞き手にとって、登場人物たちが生命  
を吹き込まれた者のように頁から立ちのぼり、あるいは歌ぞぼだてて聞く耳に響いて、  
興味を呼び覚ましたであろうこともまた十分に理解できるのである。

## 2. パミーラとフィロクリア

『アーケイディア』に登場する女性は数多く多様である。もっともダミータ  
スの妻ミソや娘モプサを除けばほとんどが王家あるいは貴族の血筋をひく女性  
であるが、国々はギリシャばかりでなくアジアの広範囲に亘っている。アンド  
ロマナ、アータクシア、エローナ、バッカ、ダイドー、リュースッペそしてジ  
ルメイニはアジアの女性たち。ジルメイニはのちピロクリーズがアマゾンに変  
装してその名を体現し、アーケイディアで活躍する。またアーケイディアの女  
王ジネシアも出身はキプロスであった。ギリシャにはユーレイニアをはじめと  
して、ジネシアとその娘パミーラとフィロクリア、アルゴス王の娘でバシリ  
アス王の義妹、アンファイアラスの母でもあるセクロピア、コリントの女王ヘレ  
ン、ラシディーモンの女王と親戚であるアーテジア、カラングアの妹の子で、  
アーガラスと結ばれるパーシニアなどが主だった名として挙げられる。そのう  
ちここでは三巻を中心に二人のヒロインとセクロウピアに焦点を絞って見てい  
きたい。ジネシア他について論じるのは他日を期したい。

NAの一卷は、いわば長く複雑な序曲であって作品全体の事件とテーマが提示  
されている。二巻では、フラッシュバックの手法が用いられ、リトロスペクテ  
ィヴに過去の出来事が登場人物の口をとおして語り継がれる<sup>(10)</sup>。そのことによ  
って一卷において示された主題、とくに「愛」や「友情」が深められ、またそ  
れまでは伏線として巧妙にはりめぐらされ暗示されながら、直接光が当てられ  
なかった「統治」と「徳」をめぐる矛盾やジレンマ、「外見と内実」のひずみと  
いった主題が顕わになってくる。これらは、筋が直線的に展開していくOAに対  
して、入り組んで回転し巻き込むような ('convoluted', Amos 序文) 構造をも

っている。ただ大筋はOAからほぼ受け継がれたものといってよからう。

しかし三巻は、OAではまったくみられなかった事件をめぐって展開する。一、二巻で語られる過去の物語 (history) は276頁までで一区切りとなり、現在の事件すなわちアンファイアラスの率いる叛乱が筋の中心を占め、「政治と統治」の問題が大きくクローズアップされる。それと同時に女性主人公たちが捕らえられ試練に遭遇するいわゆる‘captivity episode’がおなじほど大きな意味をもって語られていく。もっともその結末は、周知のように文章の途中で唐突にも断ち切られてしまうのであるが<sup>(11)</sup>。

二人の若きヒーローたち、ミュシドウラスとジルメイニことピロクリーズがアンファイアラスの反乱に関わる試練にたたされて‘heroic action’の何であるかを問われるのに対して、二人の王女たち、パミーラとフィロクリアはセクロウピアによって捕えられ、その身におなじく危機的な試練を受ける。それをとおして王女たちの女性性が問われていく。OAに見られた駆け落ちや凌辱や裁判はNAにはなく、ヒロインたちは美と不変の愛と理性を用いて‘heroic action’を示すのである。

まずパミーラとフィロクリアの姿をふり返って一巻に見ておこう。二人はむろん王女としての本質と属性を共有している。しかし同時にそれぞれの特徴を備えた個性も作者によって付与されている。次のやや長い引用は卿紳カラングーがする二人の紹介である。

Of these two are brought to the world two daughters, so beyond measure excellent in all the gifts allotted to reasonable creatures that we may think they were born to show that nature is no stepmother to that sex, how much soever some men (sharp-witted only in evil speaking) have sought to disgrace them. The elder is named Pamela, by many men not deemed inferior to her sister. For my part, when I marked them both, methought there was (if at least such perfections may receive the word of *more*) more sweetness in Philoclea, but more majesty in Pamela ; me-



thought love played in Philoclea's eyes and threatened in Pamela's; methought Philoclea's beauty only persuaded—but so persuaded as all hearts must yield, Pamela's beauty used violence—and such violence as no heart could resist.(16—17)

バシリアス王とジネシア王妃から二人の姫が生まれ・・・わたしとしてはお二人をこの目でみるとき（少くともあれほどの完璧さがより完璧ということばを入れる余地があるとすれば）フィロクリア姫にはより多く優しさが具わり、パミーラ姫にはより多く威厳がある。妹姫の目には愛神が戯れるが、姉姫の目は射すくめる。又妹姫の美しさには、人はおのずから屈伏せざるを得ないような説得力があり、姉姫の美しさは誰も逆らえぬほど暴力的なものだと見られている、と述べる。「威厳ある」パミーラと「優しさ」のフィロクリアという印象は全巻に亘り一貫して深められていく。

作者シドニーはこの二人を描写するのにそれぞれの語り方を、パミーラの強勢と装飾句を多用し自信を顕わす能動的文体と、フィロクリアのむしろ控え目で飾らぬ、しばしば躊躇するあるいは仮定法に頼る文体に依って描きわけている<sup>(12)</sup>。また文体ばかりでなく、二人はおなじ状況に置かれたり、似かよった経験をするときにも、示す反応は鮮やかに違っている。捕らわれの身で祈るときや、死をめぐる姉妹の対話にもそのことは見られるが、もう一つ例を挙げれば、お互いの恋の相手がキスを盗もうとする時の反応である。二巻の終わり近くで(277)ピロクリーズがフィロクリアを前にして語りを了え、これ以上冷静な話し手(historian)であり続けることができず、こんどはフィロクリアの語りが始まるという時に、思わずキスをしてしまう。まるで姫が語ることばを食べようとするかのように。それに対してフィロクリアは身を離してやさしく言う、「唇を自由にしてくださらなければ、どうやってわたしの話をお聞きになれますの」と。

パミーラはどうか。ちょうど三巻の幕あけの場である。誇り高いパミーラは、前日に起った野獣に襲われた危険をドーラス(すなわちミュシドウラス)が助

けてくれなければ切り抜けられなかったことを思い起こして、王子に対する態度をやわらげた。その機を捉えてミュシドウラスは二人きりになったのを幸い、理性の許しを求めず有頂天でキスをしようとする。途端にパミーラの拒絶に会うという次第であった。

ところで前日、王女たちがラドン川の辺りで水遊びをしている所へライオンと熊を放ったのはじつは、セクロウピアであった<sup>(13)</sup>。三巻に入って新たに事件が始まるのも、このセクロウピア故であった。以下この女性に視点を移して、王女たちとの対決の場を見ていこう。

### 3. セクロウピア

セクロウピアは元来アルゴス王家の出であるが、バシリアス王の義妹としてこの国の統治に関する期待を抱いてきたのに裏切られた恨みを、今はわが子アンファイアラスを楯にして晴らそうと躍起になっている。

アンファイアラスはすぐれた徳を備えヒーローの資格のある、しかし悲劇的な人物である。一巻で示されたようにフィロクリアに恋してひそかにその別邸近くまで侵入するのだが、一方コリントの女王ヘレンが彼に思慕の念を寄せ、母国を離れてまで後を追う人物でもある。悪の権化のような母から生れた「いばらの枝に咲き出たバラ」(317)と表現されている。この息子にセクロウピアはこれまでの経緯を説明して言う。

... since all is done for you, I will hide nothing from you ; and howsoever I might be ashamed to tell it strangers, who would think it wickedness, yet what is done for your sake, how evil soever to others, to you is virtue.(317)

ここにセクロウピア像が浮き出ているので見てみよう (317-319)。彼女に言わせればそもそも愚鈍な王バシリアスは齢60に至るまで独身でいたので、その弟つまりアンファイアラスの父こそ統治の権利と資格をもつとすべての人が考え

ており、そこに嫁いできたセクロウピアは長男を産み幸わせの頂点にあった。彼女は自画自賛をする。「一同の目はわたしの威力に驚き打たれ、わたしの輝く視線を受ける者は誰しも幸わせだった。教会へ出かけたかって？神々こそわたしを待ちうけていて、わたしがそこに居なければ祈りの儀式も始められなかった」。ところがそれを天が妬んだのか、夫の息の根は止められ息子が成人する前に、バシリアスは年齢に不相応な若いジネシアを妻に迎えたばかりか、二人の王女を得、自分は周縁に追いやられて屈辱の極みを味わった、と言うのである。このような次第であったから、セクロウピアの自己中心主義の生み出すさまざまな悪計<sup>(14)</sup>は、三巻に入ってその極に達する。この「耐えがたい屈辱の恨みを晴らす」計略とは、王女たちの別邸へ六人の乙女を送り、牧歌的な祭りへ誘う振りをして、二人とジルメイニを騙して連れ出し、途中目隠しをして、湖の中の島にあるセクロウピアの難攻不落の城に運び、そこに閉じこめることであった。当初の計画ではバシリアス王とジネシアをも拉致するつもりであったが、それは成功しなかった。

セクロウピアは、息子が王女フィロクリアを生命がけで恋しているのを知りつつ、その愛の力をむしろ憎しみの力に変えて、この国の統治者となる勝利を得るようと、つよく忠告する。一方姫たちには、悪意の外面をいん懃な言葉で飾り、「貴女たちがいる場所はおもてなしをするための城だから心配するな」と言うのである。こうしていわゆる‘captivity episode’が始まった。

#### 4. 美について——セクロウピアとフィロクリア

統治のあり方に反対して判乱を起こすアンフェアラスたち男性の戦いと平行して、セクロウピアがわが子の為にと王女たちを攻めにかかる戦いが、そこから展開する。武具によらない、言葉を用いての対決が始められるのであり、われわれはここで言葉の戦いに目を向けることになる。それがこの小論の中心課題であり、それをとおして作品全体に関わる主題の一面を見ることができよう。

‘Debate’論争は、この作品中演説と同じように作者が挿入する技法で、いく人

かの登場人物がしている。神託をめぐり、統治のあり方をめぐってバシリ阿斯と廷臣フィラナックスは、作品のはじめでもまた終わり近くでも論争をするし、ミュシドウラスとピロクリーズは、友情、勇気、女性、美、さらに来世をめぐって論じ合う<sup>(15)</sup>。しかしとくに女性たちの対決に、言葉による戦いをさせているのは、作者シドニーの女性観を反映したものと言えるであろう。美について、自然について、また結婚について、つまりおよそ女性性をめぐる議論が展開するのである。もっともセクロウピアとフィロクリアの対決にあっては、もっぱらセクロウピアの攻撃に対してフィロクリアは受けて立つ側に廻るのであるが。

彼女がフィロクリアの部屋に出かけていくのは、アンファイアラスに説得を懇願されたからであるが、「すでに一国を覆そうとして厚かましくも狡猾にも戦坑を穿ちはじめていた彼女には、初心な乙女など簡単に征服できると確信していたのであった」(329)。セクロウピアの戦法は巧みな漸進法である。心やさしいフィロクリアを攻略するため、まずその部屋におもむいて、半開きになっているドアからのぞくと、相手はクッションに身を沈め、目に涙を浮かべている様子である。「それはまるで沈黙と孤独と憂愁が(不幸という軍旗を掲げて)攻めよせ、喜びを征服して美という本来の居場所から追い出してしまったと思われた。涙が日照りの雨のように降り注ぎ、拭おうともしないので、頬と口に流れおち、桜桃が木からしたたる雫で濡れているようだった」(329)とコーデリアの姿を思わせる描写がなされている。そしてフィロクリアは悲しみ憂いのために髪や衣服に気を配る様子がない<sup>(16)</sup>。そのさまは後に描かれるパミーラとは対照的である。

セクロウピアは部屋に入ると早速弁舌を武器にしてフィロクリアに迫り、泣くのはおよしなさい、その歳その若さに似合わないことだからと説きはじめる。本当は話があつてきたのだけれど、ま、いいわ、と勿体ぶって言葉を濁し、相手が女らしく好奇心から訊いてくるに違いないと考えるが、姫はきわめて丁寧に自由以外にほしいものはありません、と応じる。

‘Alas, madam . . . I know not whether my tears become mine eyes, but I

am sure mine eyes, thus beteared, become my forfune.’ . . . she . . . only desired her to have pity of her, and, if, indeed she did mean her no hurt, then to grant her liberty, for else the very grief and fear would prove her unappointed executioners.(330)

すると、ここぞとばかりセクロウピアは攻め寄って、自分はその自由を与えるためにやって来た天使で、しかもその自由を「自由に命令できる」ようにしてあげると言う。さらにこの天使は貴女を「快樂の園」をとおって人生そのものに導いてあげるのだ、と。そこから一挙に本丸を攻めようとするセクロウピアの雄弁術の中に、作者シドニーは、まわりくどきと滑稽を込める。

‘My son—let it be no blemish to him that I name him my son, who was your father’s own nephew, for you know I am no small king’s daughter—my son, I say, far passing the nearness of his kinred with the nearness of goodwill, and striving to match your matchless beauty with a matchless affection, doth by me present unto you the full enjoying of your liberty—so as, with this gift, you will accept a greater (which is this castle, with all the rest which you know he hath in honourable quantity), and will confirm his gift, and your receipt of both, with accepting him to be yours. I might say much both for the person and the matter—but who will cry out, “The sun shines!” ? It is so manifest a profit unto you as the meanest judgement must straight apprehend it ; so, far is it from the sharpness of yours thereof to be ignorant. Therefore, sweet niece, let your gratefulness be my intercession, and your gentleness my eloquence, and let me carry comfort to a heart which greatly needs it.’ (331—2)

これに対して、心にジルメイニへの愛を秘めた姫は、死ぬまで処女をとおすつもりですと言う。新しいきっかけを得たセクロウピアはNature論を披瀝して

結婚を説く。「そもそも貴女が生れた時造化の女神は、貴女を女とし、母親の子としたのだから、今度は貴女が子の母親となるために最善をつくすことができるように、人に愛される美と、愛を知るための知恵と、愛に応えるためのすこやかな肉体を与えたのだ」(332) と。

Oh, the sweet name of a mother! Oh, the comfort of comforts! to see your children grow up, in whom you are as it were eternized.(332)

Natureが女性に与えた至福と母となる悦びを説教するセクロウピアの言葉には、エゴセントリックであっても、それなりの説得力がある。

フィロクリアが「結婚は重い軛きです」(a burdensome yoke) と言えば、「軛きはわたしたち人間の創造の時から課せられたもの、しかしその重さは結婚で増すのではなく、共に荷う人yoke-fellowを得ればそれだけ楽になるのです」と応じ、夫を亡くした今の寡婦の日々に自由はあるものの、ちょうど瓶に入っていたバラ水は美しい香りを保つのに、それを壊せば塵と混って甘さも美しさも失われる、そのように結婚は「束縛」ではなく「支え」なのだ。楽器も一弦で諧調をつくりだすことはできないし、単色では美を生み出せないものだと言説を重ねる。

このような一般論を一席打ってから、セクロウピアはそれを各論で息子に結びつける。フィロクリアの耳は音楽を聴くように、この話をジルメイニのことに当て嵌めながら聴くが、議論をする気になれず、幽閉を続けるかぎりそんな説得には応じられないとだけ言って、会談は物別れとなる。

セクロウピアはその後もなお、息子のためにフィロクリアの元へ、音楽やその他の贈りものを届けるが、すべて効を奏さず、アンファイアラスの恋煩いは重くなる一方であったので、この母はあらためてパミーラを口説くことにしたのである。

## 5. パミーラの祈り・刺繍と美をめぐる論争

セクロウピアはフィロクリアで失敗したのを教訓とし、一層念を入れ狡猾に事を運ぼうと、まずパミーラの部屋に行き、扉の前で中の様子をうかがう。するとパミーラは深く考えこみながら部屋を往き来していたが、そのうちその場に跪いて祈りはじめるのである(335)<sup>(17)</sup>。やや長いが、後の神慮をめぐる論争の内容と結びついているので訳して引用しよう。

ああ全てをご照覧になる光、万物の永遠の命である神、あなたにはどんなに大きな存在も反抗することはできず、卑小な存在もあなたは軽んじられません。どうかわたくしの苦しみ悩みに慈愛の目を注ぎ、あなたがよしとされるだけの救いを、あなたの無限の力を働かせてわたくしにお与えください。神よ、悪がわたくしを打ち負かすことなどないようにしてください。わたくしの過ちはあなたのみ手で正してください、不正を働く敵をあなたの正義の代行者になどなさないでください。でも神よ、これがわたくしの許しがたい愚行に対するもっとも適切な罰だとお考えなのでしたら、あるいはまたわたくしの高すぎる望みに対してこの低きに身をおとす監禁がもっとも適わしいものでしたら、あるいはまたもし謙虚さの足りないわたくしの高慢な心がこのようにして挫かれなければならないのでしたら、ああ神よ、わたくしはあなたの聖旨に従い、あなたが与えられる悲しみを喜んで受け入れます。ただこれだけはお願ひすることを許してください。(ああ神よ、わたくしの懇願、それはまさにあなたの聖旨に沿ったものなのでですから、どうぞ受け入れてください) わたくしが最大の苦悩の内に自分に与える最高の資格、つまりあなたによって創られた者であるという資格にかけて、またあなたの聖名、あなたご自身にかけてお願ひ致します。どうかあなたの輝かしい光をわたくしの心に注ぎこみ、たえず確信をもってあなたに依り頼むことができますように。患難によって破滅を来らせるのではなく、わたくしの徳を磨くようにさせてください。彼らの力が優っても、それに破滅をもたらすことはさせないでください。わたくしの身分が彼等の餌食にな

ってもかまわないのです。わたくしの苦しみを彼らの復讐の蜜としてください。それを善しとされるのでしたら、さらに彼らが罰を課してわたくしを悩ますのをお許しください。ただああ神よ、わたくしが汚れのない肉体に清らかな魂を保っておくこともできなくなるような、そんな卑劣な手を彼らに使用させることだけは、けしてなさないでください。(335—6)

このように祈ったあと、間をおいてパミーラは「わたくしがどのようになりましょうとも徳高いミュシドウラスさまの生命だけはどうかお守りください」としめくくるのであるが、この最後の部分はセクロウピアの耳にはとどかない。両の手をいっぱい天に向けて差し出し祈るパミーラの姿はさながら一幅の絵のように描出される。セクロウピアは、信仰心そのものが人の美しい姿となって天に捧げられているかのような様を目にして恥入り、己れの邪悪さを責めていられだちはしたものの、

Yet did she prodigally spend her uttermost eloquence, *leaving no argument unproved which might with force invade her excellent judgement:*  
(337イタリックス筆者)

と弁舌の力を惜しみなく用いて、パミーラにアンファイアラスとの結婚を迫る。フィロクリアがセクロウピア親子の攻撃を謙虚におだやかに避けたのに対して、パミーラは威厳あふれる態度で撃退するのだが、この日の会談は城の櫓上から遠望された武力騒動のために中断され、作品の舞台はふたたび男性を中心にめぐる(337—354)。

セクロウピアの策略はしかし、中止どころか更に邪悪さを加え、決意は遂行する、すなわちどちらかを屈服させ、あとの一人は毒によって抹殺するというのであった。

パミーラは今度はひとり読書にも飽きて、袋物の刺繡をしている。いつもは侍女がいるのにこの時は誰も側に寄せつけず、ひとりで心の高ぶりを覚えなが



ら、その思いを針仕事に込めているのである。細かく注意ぶかくそしてみごとに運針によって、バラと百合の花が形づくられていくさまが描出される。

[She] was working upon a purse certain roses and lilies, as by the fineness of the work, one might see she had borrowed her wits of the sorrow that then owed them, lent them wholly to that exercise— for *the flowers she had wrought carried such life in them that the cunningest painter might have learned of her needle*, which with as pretty a manner made his careers to and fro through the cloth as of the needle itself would have been loath to have gone fromward such a mistress, but that it hoped to return thenceward very quickly again, the cloth looking with many eyes, upon her, and lovingly embracing the wounds she gave it. (354—5イタリックス筆者)

巧みな画家も姫の手の業に倣いたくなるほど生きた花が描かれていく。布を往き来する針さばき、糸を切るとき唇でバラの花に息を吹き込むさま。百合の花の白さが白い手を映して輝き、生え出る土の色も暗くなく、かといってきらぎらする色ではなく落ち着いたものが選ばれるなど、すべてが均整のとれた出来栄えとなっている。

しいたげられた運命のもとでなされるこのような姫の手の業が、細部にわたって美と均衡がとれている様子はまさに驚嘆に値いするのだ。

... it was not without marvel to see how a mind, which could cast a careless semblant upon the greatest conflicts of fortune, could command itself to take care for so small matters.(355)

これは悲しむべき境遇にあってなお、自然に与えられた女性の手の技を完璧に惜しみなく発揮できる姿である。当時のとくに身分の高い女性たちのたしなみ

を示すであろうこの箇所描写は、われわれにたとえば、スコットランド女王メアリが囚われの身で手仕事にした、クッションやハンケチの刺繍を思い起こさせるであろう<sup>(18)</sup>。

さてセクロウピアは、この場のパミーラが服装も乱れたところなく、手仕事においても完璧であるのを見て、誤った希望を抱き、パミーラに寄り添って座を占めると、さっそく舌戦を開始する。今回の議論の出発点は「美と女性」「美と理性の判断力」である。

まずセクロウピアが姫の刺繍の美しさと彼女自身の美しさを賞め、この宝を贈られるであろう人物の幸せを語りはじめると、パミーラはそれを軽く受け流し、二人は「美」について機知問答をする。

セクロウピアの論旨はこうである。美しいものは自然のなかにも多くあるが、人の美しさ、とくに女性に与えられる美しさは、理性による判断力がこれを美しいと認めるのである。男性が栄誉の冠を求めて生命の危険を冒すのに比べて、女性は冒険に賭けなくても美をもって男性を征服する (Men venture lives to conquer ; she conquers lives without venturing. 356)。そのための女性の戦略がつぎのように示される。

・・・ and she need not seek offensive or defensive force, since her lips may stand for ten thousand shields, and ten thousand unevitable shot [*sic.*] go from her eyes. Beauty, dear niece, is the crown of the feminine greatness. (356)

だから女性のもつ美という武器の威力を高貴な目的に役立てること、つまり戦いに勝利するだけでなく、勝利の至福を分ち持つことこそ、天の意にかなうのだと説く。パミーラは、美に力があるのなら、その美がこのように踏みにじられ冒瀆されるだろうかと反論。「冒瀆だって！」とセクロウピア。「わたしが言っているのは、あなたのその美しさを愛と呼び、その若さを悦びと合わせることよ」、

... it is the only honouring of it [love] , the only preserving of it ; for beauty goes away, devoured by time but where remains it ever flourishing, but in the heart of a true lover? (357)

と *carpe diem* の思想を大袈裟にうたい上げて、話題を例の如く、息子アンフェアラスの求婚を受け入れるようにという方向へ導く。これに対してパミーラは、父の許しをまず得てください、それからわたくしの意のあるところを示しましょう、さもなければそれこそ神意に背くことになりますからと答える。姫には、結婚については「神託」故に父バシリ阿斯王が賛意を与える筈のないことがわかっていたのでこう応じたのである。

神意・神託を言うパミーラに、セクロウピアは、信心などとはまことにもって場ちがいな、そんなものは年寄りのすること、花の乙女のあなたは、機会があればそれを掴むことが大事、と言いつつ、あらゆる悪知恵に熱意をこめて主張しはじめる。信心を無知からくる恐れの生み出す迷信として退け、地に足をつけた実利的な忠告をするセクロウピアには、当時の新しい女性のもつある力強さと説得力を感じとることができよう。

Be wise, and that wisdom shall be a god unto thee ; be contented, and that is thy heaven ; ... (359)

この論理をずっと展開していこうとする彼女をさえぎってパミーラは、これまでのこやかな表情を捨て、俄然神学的な論争に挑む。

Peace, wicked woman! Peace! *Unworthy to breathe, that doest not acknowledge the breath giver ; ... O foolish woman—and most miserably foolish, since wit makes you foolish—what both that argue but that there is a constancy in the everlasting governor?* (359イタリック筆者)

人間に息を吹き込んで生きたものとされる永遠の統治者を主題とする論争である。‘virtuous anger’(359)をこめたこの激しい語調は、パミーラ本来の姿を思い起こさせる。三巻のはじめ、ミュシドウラスがキスを盗もうとしてパミーラの怒りを買ったときの言葉、

‘Away!’said she,‘unworthy man, to love, or to be loved!Assure thyself, I hate myself for being so deceived. Judge, then, what I do thee for deceiving me: let me see thee no more, the only fall of my judgement and stain of my conscience.’(309)

と同様のスタイルであり (Amos 140 ; Dobyns 62,63), ここでは論争・攻撃の開始を示す。ロマンスの伝統的なヒロインの口から出るとは思えない攻撃的な言葉で、パミーラはまず、相手に威厳をもって侮辱の一撃を加えて態勢を整え、やがて理性による論理の展開を計る方法を採用。長きにわたるその弁論は、相手に反駁を許さず一気呵成の勢いでなされるが、そこには一定のパタンが見られる。まず“*You say~*”と相手のことばを前提にしてそれに対する自説の陳述を行い、“*but you will say~*” “*but you may perhaps affirm~*” というように、相手の言い分にも耳を貸して語調を和らげ、やがて“*if you mean~*”と新しい方向に論を導き自説の論拠を積み重ねていって、ついにクライマックスの結論 (363) に達するのである。

論の要諦は神の存在と神<sup>プロヴィデンス</sup>慮を認めることにある。このいわば神学論については、つとにW.エルトンやJ.F.ダンビーがネオ・プラトニズムやプロテスタンティズム、なかでもカルヴァンの影響を論じて以来、セクロウピアの無神論Atheismに対するProvidenceを明らかにするため張った論陣として解釈されてきた<sup>(19)</sup>。ただ『アーケイディア』の舞台は前キリスト教時代のものであり、登場人物はギリシャの異教徒たちであるから、彼らはキリスト教的な啓示は知らない。しかしトマス・モアの『ユートピア』の人々と同じように、理性をもちその理性

が正しく働くとき、人は正邪を判断した普遍的秩序の存在を感知することができる。パミーラもまた、曇りのない理性と生得のすぐれた感性とによって神と神慮の存在を演繹的に導き出すことができるのだ。

その筋道をやや詳しく辿ってみよう。セクロウピアは信心とか自然を超えるものに頼るのは、事物の理をわきまえぬ故の恐れからくることだという。パミーラはそうは考えない。

You say, because we know not the cause of things, therefore fear was the mother of superstition. . . . Nay, because we know that each effect hath a cause, that hath engendered a true and lively devotion ; for this goodly work of which we are, and in which we live, hath not his being by chance (on which opinion it is beyond marvel by what chance any brain could stumble!)—for if it be eternal as you would seem to conceive of it, eternity and chance are things unsufferable together, for that is chanceable which happeneth ; and if it happen, there was a time before it happened when it might not have happened, or else it did not happen—and so, of chanceable, not eternal:(359—60)

もしこの世界が永遠なら偶然によって支配されている筈はなく、何故なら「永遠と偶然は両立しない」からであり、永遠の統治者は不変なのだと論じる。またもし世界が永遠でないなら、始源があった、しかもその始まりは偶然によった筈はない、何故なら偶然は無から (*ex nihilo*) 創造することはできないからである。世界に働いているのは、変化し得る偶然ではなく、わたしたちが目にしてるのは“steady and permanent”な姿(360)であり、多用の中に統一があるのは、神がそのように世界を創り支配しているからである。しかもそのような神は、無限の叡知と力をもつ方、善かつ正しい存在なのだ (362)。

パミーラの語るところは高度に形式的・論理的に組み立てられていて、王女とはいえ年令の若い女性の口にのぼるのは想像し難いという意見もある (Rees

105,6)。しかしまた、神学について議論したり翻訳したりすることは、当時の知的女性に唯一できる範囲のことであつたらしい<sup>(20)</sup>ことを考えれば不自然ではなく、パミーラの性格には符合するものであると言えよう。なおこの思想内容については後に付言したい。

パミーラの論理はクライマックスに到つてついに次のような激しい断罪でしめくられる。神は存在するのであり、すべてをご存知の神はあらゆる被造物の暗部の秘密——人の心とそこにひそむ隠された思いまで知っておられるのだ<sup>(21)</sup>。だから

．．． assure thyself, most wicked woman, . . . assure theyself, I say—for what I say depends of everlasting and unremovable causes—that *the time will come when thou shalt know that power by feeling it*, when thou shalt see his wisdom in the manifesting thy ugly shamefastness, and *shalt only perceive him to have been a creator in thy destruction!* (363イタリックス 筆者)

と破滅を予告するパミーラは、捕囚の身が専制をふるう者以上に権威と威厳を持っていることを示すのである。

there was a light more than human which gave a lustre to her perfections  
(363)

一方セクロウピアは、<sup>こもり</sup>蝙蝠のように太陽を認めてもその光を喜ばぬという風情で、言う言葉を持たず、口ごもるばかりで、ついに応じることは出来ない。言葉によるパミーラの攻撃の前に完全な敗北を喫したことになるのである。

すごすごとこの場を去るセクロウピアは、しかし悔いる様子など少しもなく、

．．． repining but not repenting, condemning greatly . . . her son's over-

feeble humbleness, and purposing to egg him forward to a course of violence ; (363)

なお息子をけしかけ、理を棄てて暴力に訴え、王女たちを徹底的に苦しめるが、死に至らしめることはついに出来ず、かえって自らの死を、わが子アンファイアラスの手にかかるという仕方で招いたのである(439—440)。まさにパミーラの説く Providenceがこのような形で実証されたと言えるのである。論争の場面のもつ重要性は、作品の終りに照らしてもまた証しされたことになろう。

なお論争の背景にある考え方については、多くの解釈があるけれども、筆者としても付言すべき点があるように思われる。それは先述したが、パミーラの論述には当時の女性の口にのぼるとは考えにくいという意見についてである。パミーラ像に符合することは確かであり、また一方セクロウピアの *carpe diem* 論や Atheism についても、人間像がそれを語るに適わしく作者によって創造されているのであるが、われわれ読者は論争の背後に作者の声を、もっと言えば当時の人々の二つの対立する声を代弁するものとして聴いているような思いも否定できない。その点で言えばシドニーは、この二人の女性に、とくにパミーラに思想の十全な表現を与えていると考えられるのである。シドニーにはランゲ (Hubert Languet) と共にフランスで親しく影響を受けた、モルネイ (Philip of Morney, Lord of Plessie Marlie) の仕事の翻訳がある。「キリスト教の真理性について」 (*A Worke concerning the trewnesse of the Christian Religion*) である (注19参照)。その読者への序文に言う、「最近恥しいことながら、キリスト教徒の名を借りながら、実際には異教徒あるいは無信仰者である人が多く見られる」と。ある者は現世の快樂に現<sup>うつつ</sup>を抜かし、魂について無知である快樂主義者がいる、だからこの書が必要である、と (PW 189)。かなり長い論文であるが、理性がわれらを神認識へ導くこと (195)、永遠の存在が無限性を有しつつ不変であること (256—260) などが論じられていて、パミーラの発言と軌を一にしている。シドニーは彼女の口をとおして自らの信念を披瀝していると言えるのであろう。

## おわりに—刺繍と論争のデザイン

メアリ・エレン・ラムは、当時の女性読者がNAのとくに三巻の‘captivity episode’を‘model of “a form of heroism appropriate for young women”’として読んだと言う (Lamb 109)。王女二人は一貫して「やさしく謙虚なフィロクリア」と「威厳のあるパミーラ」であるものの、三巻の‘captivity episode’においてはそれぞれ成長を見せるのも事実である。世間知らずの幼ささえ残していたフィロクリアが、セクロウピアの残忍酷薄な拷問に耐え抜くことによって(423~427)ピロクリーズへの愛を確固として動かぬものに成長させたばかりか、ピロクリーズが捕囚の閉塞状態を切り拓く術を見出せず、あまつさえフィロクリアの擬似斬首の場を目撃して自死に走ろうとするとき、つよくそれを押しとどめて説得する力を備えるようになる(431—435)。またパミーラは完璧な美しさ故に恋の入りこむ隙さえ見せなかった心に、囚われの身となって祈るとき、愛する者の生命が永らえることを神に求め、手仕事に悲しみと愛をこめる女性性を、その完璧さに加えて得るのである。このことは、二人が経験とくにも試練をくぐることによって、ひたすら愛される存在、愛の客体objectにすぎない存在であったのが、愛する存在、愛の主体subjectへ、主体性を得たのだと言えるのではないだろうか。そこにNAの女性像の際立つ存在感が浮び上るであろう。

NAは、三巻がもっとも興味ぶかいとする評者が多いが、近年とくにこの三巻には、‘pastoral romance’から‘epic combat’ (McCoy Chapter 6) へという図式で‘political’な問題に絞って高い関心が寄せられている。しかしまたこれと平行して女性たちの展開する世界でも、これまで見てきたような点できわめて興味ぶかいといえることができる。男性ヒーローの武具を取ってする葛藤に対しては、言葉による論争があった。そして論争は祈りの言葉に結晶し、手の業のデザインとも関連したパターンを作って、この作品の全体を編み上げているように思われる。

シドニーが好んで用いている甲冑の細部装飾、とくに‘impresa’, ‘device’にお



いて用いられたエムブレムの表現方法は、具体的な絵そのものと言葉によるモラル、モットーと、そしてそこから導き出される一般主題から成り立つものであるが、パミーラの刺繍するバラと百合をあしらった袋物から美の論争へ、そして神慮をめぐるセクロウピアとの論争の対決に至までのプロセスに、*pictura*, *inscriptio*, *subscriptio*のパターンが応用されているように思われる。刺繍の図柄の、バラや百合やそこに描かれる土は、すべて均衡がとれていて、細部に技巧がこらされてはいるものの、全体に対してはほんの飾りにすぎない‘well-proportioned (as that though much cunning were in it, yet it was but to serve for an ornament of the principal work)’ (355) そのような注意ぶかい方法で描出されている。美の具体例（刺繍）から美についての対話へ、美と永遠についての議論から永遠の存在をめぐる論争へと連なるデザインが浮かび上がってくる。そしてこのプロセスは、つとにティリヤードが言った‘from the order of nature to that of grace’ (Tillyard, 298) という方向性をもったOAからNAへの改稿の過程と軌を一にしているように思われる。

このような細部の巧緻をきわめた積み重ねによって、作品全体‘the principal work’は、それがたとえ未完に終わっているとはいえ、一つの完結性を得たものであるといえるのであろう。

〈注〉

1. かの有名な“Defence of Poesie”の一句。 *The Prose Works of Sir Philip Sidney* Vol. III. ed. A. Feuillerat (Cambridge University Press, 1968) p.9. (以後PWと略記)
2. Cf. *Sir Philip Sidney: An Annotated Bibliography of Texts and Criticism* (1554—1984) eds. Donald V. Stump, Jerome S. Dees & C. Stuart Hunter (G. K. Hall & Co., 1994) の他 *MLA Annual Bibliography*, *ELR* に詳しい。とくに *ELR* 26 (1996) pp.167-197. Reid Barbour, “Recent Studies of Prose Fiction, 1603—1660, including Sidney’s *Arcadia*” は現時点で活字によって見られる、Sidneyを含むイギリス・ルネッサンスの研究論文一覧として有用である。
3. Joan Rees, Katherine Dulkan-Jones, Katherine J. Roberts, Ann Dobyns, Mary Ellen Lamb, Clare Kinney, Margaret P. Hanney などの著書、論文。文献表参照。

4. 献辞といえるこの手紙は、以後すべての版に印刷されてきたがJean Robertsonらの考証によって*The Old Arcadia*に属する筈のものとされ、小論で扱うテキストVictor Skretkiewicz ed. *The Countess of Pembroke's Arcadia* (The New Arcadia), Oxford University Press, 1987ではAppendix IIIとして挙げられている。なお以後このテキストから引用し、括弧内に頁数を示す。
5. Cf. Mary Ellen Lamb, *Gender and Authorship in the Sidney Circle* (University of Wisconsin Press, 1990) とくにChapter 2.
6. *Astrophel & Stella* 7 番を参照。  
Philoclea—Penelope Devereuxについては、R. W. Zandvoort, Sidney's "Arcadia": A Comparison between the Two Versions (1929 Russell & Russell, rpt. 1968), 114. Kenneth O. Myrick, *Sir Philip Sidney as a Literary Craftsman* (Harvard University Press, 1935), 237参照。
7. しばしば引用されるシドニーの父Sir Henry Sidneyの手紙 (1582/3年 3月 1日付, ウォルシンガム宛) に彼が任地から戻ったとき、妻は天然痘のため“foul”で二目と見られぬ顔になっていたと書いている。
8. Cf. Dennis Kay, “She was a Queen, and Therefore Beautiful”: Sidney, His Mother and Queen Elizabeth,” *RES* 43 (1992), 18—39.
9. E. A. Greenlaw, George Buckley, K. Dunkan-Jones etc.
10. Joan Reesはその著作のChapter 4 “Telling the Tales” in *Sir Philip Sidney and Arcadia*で、BK1 overture, prospective BK2 retrospective BK3 climactic events と図式化した。他に現代風用語でBK2の語り方をmeta-narrativeと呼ぶこともできる。McCanles, 147ff. も参照。
11. この中断と作品の未完成をどう解釈するか、解釈の根拠が希薄であるから、永遠の未決事項であるが、主だった考え方は2つあって①政治活動と死のための意図せざる中断。②大義を失ったとして意志的に筆を折った③改稿をすすめていくうちoriginal planに破綻をきたした④OAとNAのギャップが大きくなりすぎて嫌悪のうちに執筆をやめたというもの。近年のSidney観には、宮廷人としてまた政治参与に関して挫折したとみるペシミスティックな見方が多く、また友人グレヴィルが伝える言葉(死の床でSidneyがこの作品を焼き捨ててほしいといったという)Greville, *The Life of the Renowned Sir Philip Sidney* (1652) に、この見解を支持する語調を読み取る場合が多い。筆者は現時点で明確な解釈を持ち合わせてはいないが、しかしあの終わり方はあまりにも唐突、また文脈からいってもanti-climacticであるので、文の途中の欄筆は、期を得て執筆再開のための意図(文脈の感覚を容易に回復できる?)かと推測したりする。そういえばSidneyには先を続けるための伏線、しかもdesperateな作者像とはちがって肯定への意思を匂わせる伏線がいくつも見られる。アンファイアラスの身体はヘレンの故国コリントですぐれた医師の力で甦える。ミュシドウラスが王女たちの開放に成功

- するだろう。その先にhappy endingを期待するのかどうかはむろん疑わしいのだが。考えてみればSidneyは自作をいずれも、初期の作品*Lady of May*という機会を与えられて作り上げたもの以外は、生前に印刷したことがない。それをみても「完成したもの」とみなさなかつたのかも知れない。たえず手を入れようとしていたのであるから。
12. Ann Dobynは*The Voices of Romance*の中でこの点の詳しい分析を行っている。文献参照。
  13. OAでもピロクリーズとミュシドウラスは二人の王女をライオンと熊から救うが、NAではこの野獣がセクロウピアの悪意——王女たちを殺して息子アンファイアラスに王位を得させるための——によって放たれたことになっている。
  14. 二巻に語られる暴動もセクロウピアが手下を使って起こしたものであり、野獣を放って王女たちを餌食にしようとしたのは前述のとおり。
  15. 神託をめぐる議論や統治をめぐるpp.19~22, 416~418参照。ミュシドウラスとピロクリーズの交える女性と美についての論戦は主としてpp.50~53, 70~73他。
  16. “In the dressing of her hair and apparel, she might see neither a careful art nor an art of carelessness, but even left to a neglected chance, which yet could no more unperfect her perfection than a die any way cast could lose his squareness.”  
このように描写されていて、先頃着飾って現れたアンファイアラスの姿と対照されて、姫の完璧さを損うものでないことが示される。
  17. この祈りは、のちの時代にチャールズ一世が処刑台で祈ったことで知られ、またその点をミルトンは*Eikonoklastes* (1649)で、「異教の神に捧げた異教徒の祈り」と断じていることでも有名である。John Milton, *Eikonoklastes in Complete Prose Works* ed. Merritt Hughes (Yale University Press 1957) Vol.3. p.362.
  18. それらは今もVictoria-Albert Museumで目にすることができる。
  19. D.P. Walker, “Ways of Dealing with Atheists. A Background to Pamela’s Refutation of Cecropia” *BHR* 17 (1955) 252-77はしばしば言及されるが、筆者は未見である。またOAを扱ったA. O. Weinerも間接的にプロテスタンティズムとシドニーを論じてこの点の参考になる。ここではSidneyが英訳したPlessis-Morney, *De la verite de la religion chrestienne* (Feuillerat ed. *PW* Vol.IIIに収録)も参照。
  20. Cf. Margaret P. Hanney ed., *Silent But for the Word* (The Kent University Press, 1985)所収の諸論文参照。
  21. 前述のパミーラの祈りはおなじ信仰に基いて捧げられている。

### Select Bibliography

text:

Sir Philip Sidney, *The Countess of Pembroke’s Arcadia* (The New Arcadia) ed.

Victor Skretkovicz (Oxford:Clarendon Press, 1987)

*The Prose Works of Sir Philip Sidney* ed. Albert Feuillerat (Cambridge University Press, 1969) 4 vols.

Fulke Greville, *The Life of the Renowned Sir Philip Sidney* (Scholars' Facsimile. New York : Delmar 1652 rpt. 1984)

criticism:

Allen, M. J. B. et al eds., *Sir Philip Sidney's Achievements* (New York : AMS Press, 1990)

Amos Jr, Arthur K., *Time, Space, and Value: The Narrative Structure of the Arcadia* (Bucknell University Press, 1977)

Cerasano, S. P. and Marion Wynne-Davies eds., *Gloriana's Face: Women, Public and Private, in the English Renaissance* (Harvester Wheatsheaf, 1992)

Connell, Dorothy, *Sir Philip Sidney: The Maker's Mind* (Oxford, 1977)

Craft, William, "The Shaping Picture of Love in Sidney's *New Arcadia*", *Studies in Philology* 81 (University of North Carolina Press, 1984)

Danby, John F., *Poets on Fortune's Hill* (Faber and Faber, 1952)

Dobyns, Ann, *The Voices of Romance: Studies in Dialogue and Character* (University of Delaware Press, 1989)

Doherty, M. J., *The Mistress Knowledge: Sir Philip Sidney's Defence of Poesie and Literary Architectonics in the English Renaissance* (Vanderbilt University Press, 1991)

Duncan-Jones, Katherine, *Sir Philip Sidney, Courtier Poet* (Yale University Press, 1991)

Greenblatt, Stephen, "Sidney's *Arcadia* and the Mixed Mode," *Studies in Philology* 70, (University of North Carolina Press, 1973) 269—78

Greenfield, Thelma N., *The Eye of Judgment ; Reading the New Arcadia* (Bucknell University Press, 1982)

Haney, Margaret P., *Philip's Phoenix: Mary Sidney, Countess of Pembroke* (Oxford University Press, 1990)

Hamilton, A. C., *Sir Philip Sidney, A Study of His Life and Works* (Cambridge University Press, 1977)

Heninger, Jr., S. K., *Sidney and Spenser: The Poet as Maker* (Pennsylvania State University Press, 1988)

Kay, Dennis ed., *Sir Philip Sidney: An Anthology of Modern Criticism* (Oxford: Clarendon Press, 1987)

- Kinney, Clare, "The Masks of Love: Desire and Metamorphosis in Sidney's *New Arcadia*" *Criticism* Vol. XXXIII, No. 4 (Wayne State University Press, 1991) pp. 461—490.
- Lamb, Mary Ellen, *Gender and Authorship in the Sidney Circle* (University of Wisconsin Press, 1990)
- McCanles, Michael, *The Text of Sidney's Arcadian World* (Duke University Press, 1989)
- McCoy, Richard, *Sir Philip Sidney, Rebellion in Arcadia* (Rutgers University Press, 1979)
- Myrick, Kenneth, *Sir Philip Sidney as a Literary Craftsman* (University of Nebraska Press, 1965 2nd rpt.)
- Rees, Joan, *Sir Philip Sidney and Arcadia* (Associated University Press, 1991)
- Roberts, Katherine J., *Fair Ladies: Sir Philip Sidney's Female Characters* (Peter Lang, 1993)
- Syford, Constance M., "The Direct Source of The Pamela-Cecropia Episode in *The Arcadia*" *PMLA* 49 (1934), pp.472—489.
- Tillyard, E. M. W., *The English Epic and Its Background* (Oxford University Press, 1954)
- Weiner, Andrew, *Sir Philip Sidney and the Poetics of Protestantism, A Study of Contexts* (University of Minnesota Press, 1978)